

短歌表現 (VI) —コミュニケーション技術における学習効果の検討—

土 永 典 明

Tanka Practice (VI) : Composing poems of daily life and nursing care

Noriaki Tsuchinaga

はじめに

死者や大自然の神々、道々の精霊たちへの語りかけの言葉として、万葉の昔から短歌は読まれていた。また、村の若者たちが集まる場である歌垣では、男性から女性への恋の言葉の代わりに歌を詠むという慣習があった。普段は言えないことや、家族や友人に伝えたい感謝の気持ちなどは歌を詠むことにより、それが実現するのではないかと考えられる。

短歌というと、どうしても百人一首などの優雅なイメージが付きまとい、「なり」や「けり」などの助動詞などを使ったり無理に季節感のある情景などを詠おうとしがちである。しかし、初心者がそのような詠い方をすると、表面上の言葉だけ立派で中身が空っぽの歌になってしまうことがよくある。たとえば難しい文語調の言葉などを用いる必要はなく、また、話し言葉そのままのような内容でも感性さえあれば素敵な歌に仕上がるのである。短歌は、元来、文語調で詠むのが基本であり、その中に口語調を取り入れたりすることはあった。しかし、近年では反対に口語調から短歌をはじめて、徐々に文語調を学んでいくという流れに変わってきている。

まずテーマを捉え、それについてどのような感想をもったか書き留め、五・七・五・七・七に乗せていく。この定型と同時に、偶発性を愛するということや、一瞬一瞬を生きているということに対する感度が大事である。

I 短歌の作り方

短歌の詠み方に悩んだときは自然詠を詠むとよいと言われている。自然詠とは作者自身や作者の考え思想などが全面に出てこない、自然や他人の姿、動作などの見たままを詠った短歌である。つまり、読み手が目の前の対象に意識を集中して見ることで、その対象の本質を捉えることができる。短歌は目の前にある一つの小さな対象に絞って詠むほうが歌に個性も表れて詠みやすい。物を見るには、固定した観念にとらわれず先入観を持たずに、対象をありのままに見ることが大切である。テーマは起、状況説明は承、締めは転か結という要素になる。また、体言止めの技法を使用すればテーマが後になる場合も

ある。体言止めには、そこにきれが出てテーマを強調する効果がある。テーマを五・七・五の上の句の形式に、思ったことを七・七の形式に入れ込む。テーマに関する形容詞がない場合は、形容動詞でも構わない。テーマは字数に入るように言葉を選んで表現する。字数に入るなら、その他強い印象を持ったどんな言葉でも構わない。長くなってしまったら、下の句の七まで続けてしまうとよい。長くなったら、下の句における落ちの字数が減るだけなので、対象自体の動きの描写に力を入れる。次に、感想の母体となる決定的な七文字を選んで、上の句と下の句を繋いで完成させる。また、整った淡い作よりも形が不十分と思えても、内容の濃い作のほうが読者の心を打つものがある。さらに、奇抜より素直、華美より質朴、虚飾より真実を常に念頭に置いて、作歌をすることが大切である。

Ⅱ 短歌の基本を推敲

はじめに組み立てた句を推敲していく。まずは字数のチェックをし、字余りや字足らずがあれば体言等の表現を替えたり、強調したい部分に係り結びを取り入れたりする。それでもしっくりいかない際には、同じテーマでも、別の体言から表現できないか試行錯誤してみる。倒置法や縁語、本歌取り等の技法を採用するのも効果的な場合がある。和歌集や好きな歌人の歌から、共感できるキーワードを探して、本歌取りに挑戦したり同様な歌をまねて作ったりすると短歌の世界がより身近に感じられる。また、外来語を用いるときには、殊に意味をしっかりと確認しなければならない。言葉を十分に自身のものにするという原則を特に大切にすることが必要である。短歌は詠んだままにせず何度も見つめ直し、推敲に終わりはないという気持ちで自分自身の歌を見つめ直す。さらに、『歌会』などの場に参加することで自分自身の歌について多くの人から意見を聞くことができる。また、自分も他の人の歌に意見を言うという意味で非常に勉強になるものである。

Ⅲ 短歌でつづる学生の日常生活

1) 介護

○おばあちゃん孫だと思いハグされて私の心温かくなった

(講評) 実習先の施設で利用者が作者に抱きついてきた。それが嬉しかった作者である。

○実習時何を言ってるのか解らなく唯一解った「すぐそばにいて」

(講評) 利用者が懸命に実習生である筆者に話しかけた。やっと理解できた言葉が、そばにいてほしいと言う言葉であった。介護者が利用者のそばに寄り添うことが、如何に大事かわかった瞬間である。実習中、同じ利用者の食事介助をさせてもらうことで、その利用者の特徴を知ることができた作者であった。

○「幸せ」とほころぶ顔と眩きに私たちがいる意味合いを知る

(講評) 作者が介護実習で、「介護福祉士」という資格を取得して介護をする必要について感じた瞬間であった。

○車椅子一步一步に力入れ小さな背中見守る私

(講評) 作者は自立支援の促進と言うことを実習で学んだ。

○握られる手の強さと震えから伝わってくる不安と恐怖(「NHK介護百人一首2016」入選作品)

(講評) 作者が介護実習の入浴介助で、認知症の利用者を介助したときにそう感じた。

○手遊びを楽しむあなたの面影に幼い少女の姿が見えた

- （講評）作者が介護実習のレクリエーションの折、認知症の利用者と遊んでいて感じた。
- 「ありがとう」些細なことで眩かれ始めて聞いた利用者の声
（講評）介護実習の食事介助で、ヨーグルトの蓋を開けただけで、普段は全く話さない利用者から礼を言われた。そのことが嬉しかった作者であった。
 - 誰よりも口数多いその人は誰より皆を気にかける人
（講評）実習施設で利用者の食事介助をする職員は、そばにいる利用者に対しても気を配る優しい人であった。
 - 「盲目の利用者がふと立ち上がり「あなたが来た」と言われた幸せ
（講評）全盲の利用者が、実習最終日に声で作者のことを理解してくれた。それが嬉しかった作者であった。
 - 音楽に合わせて一緒に手を叩く笑顔がまるで太陽のよう
（講評）認知症で言語障害があり、表情を変えることのない利用者として作者が音楽を聴いた。ふと作者が利用者の手を触れるように叩いたら、笑顔を見せてくれた。
 - 何回もナースコールが鳴る夜勤寂しさ不安感じた数かな
（講評）夜勤のときに同じ利用者が、何度も用はないのにナースコールを鳴らした。その時に作者は、利用者の寂しさを感じ取った。
 - 「長生きをしてもらいたいお婆ちゃん」カルテに書かれた家族の思い
（講評）老母に長生きしてほしいと思う家族。作者は実習をしている時に、カルテの文面から読み取った。
 - 職員に「デートに行くよ」と自慢する老いと二人で園内散歩
（講評）実習中、毎週金曜日に作者と利用者で園内散歩に行く様子を詠った。
 - 「下手だね」と毎日毎日言ったけどあなたの為に言い続けたの
（講評）利用者から実習生へのエール。
 - 「帰らねば」施設うろつく利用者として手繋ぎ歩く職員さん
（講評）帰宅願望があり、時々施設を徘徊する利用者と一緒に職員が談笑しながら歩いている様子を詠っている。
 - 「誰か来て」本当は自分でできるのにちょっぴり甘える九十九歳
（講評）本当は一人でトイレに行くこともできるのに、「ズボンが上がらない」等と実習生を呼ぶ姿が愛らしい。
 - 明日からあなたに会えるの楽しみと笑ってくれた利用者さん
（講評）実習の初日に笑顔で「これから毎日会えるね」と利用者になんげ、嬉しかった作者であった。

2) 日常生活

- 昔より丸くなった祖母の背に多くの苦労の重さをみる
（講評）以前より円背になった祖母の姿を見て、「苦労をして歳を重ねてきたんだなあ」と感じた作者であった。
- 祖父の手を握り動かぬ足に言うまた一緒に畑行こうよ
（講評）もう歩くことが困難な作者の祖父、そのことを理解できない認知症の祖母。
- 寂しげに外を眺める祖父の声祖母が帰ると笑顔戻れり
（講評）祖母がそばにいないときの祖父は、どことなく寂しそうだ。しかし、祖母が帰ってくると

生き返ったように祖父が元気になる。普段はどれだけ祖母を悪く言っている、やはり祖母が一番だと感じた作者であった。

○あと少しお腹が出てる姉を見て家族が増える実感が湧く

(講評) 6月に出産を予定している姉を見て、新しい家族が増えることに楽しみが募る作者であった。

○キッチンに立って夕食作るとき「ただいま」の声右耳で待つ

(講評) 作者が家族の夕食を作っているとき、夕食が冷めないうちに家族が帰ってこないかと、今か今かと待っていた。

○テレビから流れる声は大音量祖母の老化を日に日に感ず

(講評) 最近、祖母の耳が遠くなってきた。テレビを観ているときは、日に日に音量が大きくなってきているのを感じた作者であった。

○俺の城六畳一間の空間で食う寝るほやくありのままなり

(講評) 本学へ入学して、なかなか出来ない独り暮らしの体験を、両親にさせてもらっている。そのことに感謝の念を抱いている作者であった。

○ワクワクと胸を躍らせいざ入学ただ辛いのは不慣れなヒール

(講評) 初句の擬音語と結句のユーモラス感が、ほのぼのとしていて和ませる。

○周りでは就活等のことばかり皆が急に大人に見える

(講評) 就職活動の開始時期が遅くなり不安を感じていたが、就活本気モードへ切り替えた作者。

○バイトをし勤務終了バスが無く歩いて帰る冬の雪道

(講評) バスの本数が少ない地域で、アルバイトをしている学生の帰り道を詠った。

まとめ

短歌は日本古来からある詩形である。そのため、形式の約束があるということについて、古臭いという人もある。しかし、今日の日本の詩としていくらかでも新しい内容を盛り込むことができるばかりではなく、定型には定型の長所というものが多くある。短い定型であることによって詠みたいと思う人であればだれでも詠めるし、また日本語の詩としてすぐれた作品を産むことのできる詩形である。短歌を鑑賞しあうことは他人の心の声に耳を傾ける良い機会になるので、今後も短歌を教育に取り入れていきたい。

参考文献

永田和宏 2015 人生の節目で読んでほしい短歌. NHK出版新書.

松村由利子 2010 語りだすオブジェ. 本阿弥書店.